

臨床研究内容 ホームページ公開用

1. 研究課題名称

脳血管内治療後の虚血性脳梗塞患者における発症前フレイルおよび機能障害は術後早期の歩行能力に関連する：後ろ向き観察研究

2. 研究の背景・目的

脳卒中初発患者様は増加傾向にあり、複雑な機能障害で最も一般的な原因とされています。近年、rt-PA療法や脳血管内治療が超急性期脳梗塞者に対する治療として展開されるようになってきています。脳血管内治療は、安全性と有効性が証明されており、内科治療群と比較し90日後の転帰良好例を増やしますが、重度の障害が残存する症例も存在するため、治療後の包括的な評価が重要です。大規模のデータでは、転帰不良は21.5%でした。脳血管内治療後のリハビリテーション対象者も増加傾向にあり、症候性頭蓋内出血などの治療特有の合併症に注意しながらリハビリテーションを実施していく必要があります。しかし、身体機能や歩行能力といったリハビリテーションにおける脳梗塞後の評価指標を用いた報告は少ないです。

入院時に脳卒中患者様の3分の2は自立歩行が困難とされています。そのため、発症後の歩行能力は非常に重要で、社会参加や生活の質にとって不可欠です。歩行能力の回復に影響する要因は、年齢や重症度、下肢運動麻痺、筋力、感覚障害や発症前のフレイルなどが知られています。フレイルとは、加齢とともに心身の活力(運動機能や認知機能等)が低下し、複数の慢性疾患の併存などの影響もあり、生活機能が障害され、心身の脆弱性が出現した状態であるとされています。

脳血管内治療後の術後早期に歩行可能な要因を検証した報告はなく、関連要因は不明です。そこで本研究は、超急性期において脳血管内治療を受けた脳梗塞者を対象に、術後1週までに実用的な歩行が可能となる関連要因を探索的に調査することを目的としました。

3. 対象者および期間

頭部CTやMRIにより脳梗塞と診断され、発症から24時間以内に製鉄記念八幡病院に入院しリハビリテーションを受けた患者様とします。期間は、2016年1月～2023年8月までの対象者を調査・研究します。

4. 研究内容

脳血管内治療後の術後1週目の歩行能力について関連要因を調査します。従属変数を歩行能力とし、関連要因を説明変数とした単回帰分析で有意差のあった項目を分析します。次に、従属変数を歩行能力とし、有意差のあった項目を説明変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行います。

5. 個人情報の管理について

データの集計の際は患者様の氏名をコード化し、個人を特定できないように配慮します。

6. 研究期間

2024年2月から2024年6月までに実施します。

7. 医学上の貢献

脳血管内治療後の術後早期に歩行可能な要因を検証し、関連要因が分析できた場合、患者様の歩行予測が行え、今後入院される患者様の予測向上に役立つものと考えます。

8. 研究機関

製鉄記念八幡病院リハビリテーション部

9. 連絡先（研究責任者）

上記研究対象期間において該当になる方で研究に対して不都合がある場合や研究に対してご不明な点がございましたら下記の連絡先まで連絡をください。

製鉄記念八幡病院リハビリテーション部 原山永世
805-8508 北九州市八幡東区春の町 1-1-1 TEL:093-671-9318